はし姫

宇治巻　一

哥ノを名ごとり

[V. 45]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 45
copy 1
Asian
Japan
Lage

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

50

そのころ世まうぞまへれ給ふぬ古宮（ふるみや）おりしかり。
母（大臣女之）ことなどもやむごとなくおしまてまちぐこと
なるべき荒しなどおりしける後時うつりて世中に
たしこるめられ給けるまぎれにまうくいとか
ごりなくれうしろこなども物うしゝ見しき
ころくまてうぐまつけて世後そむきさり
けるほやけはこうしまより所なくさしとられ
これはへるやうなりおのこもせうしの大臣のれ
むまめなりける衣（あかれ）にころ（八宗ん）ばそくおやこちのおぼ
しまきてこりしき後などさひいで給ふことしへ
なきことおほれどふるきれちぎりのふろなき

ぢうり候うき世のるぐさめまてうたゝまるなく
夜のこゝりしかへり。年ごろふるゝ。此子も物し給
はてこゝろもとなりそれば。さうぐしくつれ
づれなるなぐさめまいりでおりしかたんちごもがれ
と。こゝやぞときぐ。見しの給けるゝ。先づらしく
姫君（ひめ 大君と云之）のいとうつくしげなるむまれ給へり。これを
かぎりなく何れと思ひしづき深し給ふ。まる
さしつゞきそしきだこゝかて。これこびを男（おとこ）までも
なぐおぼしたるゝ。おろしぢ（又姫君之中ノ君と云之）後までこゝろかは
し給ふなるゝ。いと（小方）いたくひてうせかぬ。みや（八宮ハ）
おきましうておぼしまどふ。何りふるまつけて。

いとりしるくさしがらきことおほゆる世なれど
こすてがたく哀なる人の(かなしき)れ有さ後ころろざ後ゆ。
かけとぐめしるくほどしまてこそすぐしきつれ。
ひとりとまりていとぐすき後じくもあるべきうれ。
いくけるきへどともひとりそぐくこそそんほど。恨(うぎり)
ある(上らうこ)身まて。いとおこがましうひとりつるべきこ
とくおぼしたちて。ほいもとげまほしうき給
なれど。こゆづ(姫さうと)ひともなくてのうしとぐめんをい
こじくおぼしたゆさひけくとし月もすれば。との
とのおよすけ後さり給。さ後かたちのうけうしう
あらまほしきほ。明(あけくれ)嘗のれなぐさめまて。を乃

げうぞ也しきまふ。後(のち)にむまれ給し君(中宮)をば
さふし姫人ども。いでやありふしころうくるどうら
つぶやきて。心にいれてもなつかひ男しざりなれど。
(小方ノ)かぎりのさ海にて何(なにごと)定もおぼしつぎりし程
なぐらこれ(中宮ノ事)をいと心ぐるしとさひてさぐ此君(中)後ば
うたうまこなて。おくれとおぼせとづりさぐ一こと
なん(八)家にきたしとき給なれば。ざ(八ん)きの世のちぎりも
つきありふしなれど。さうべきまこそいあり
けめと。いまこと(小方)こししまでいと哀とさてうち
ろめたげにの給しほどおぼし出つ。これ君(中)とし
もいとうるしうさ(そまつ)生り給。うたらなんまことにいやく

うけくしうゆくしきまでもれし給けるひめぎ（大云）も
ころどせしづまりしあるこまて。こる花もて
なしもけるくころよくきさ海ぞしまへる。
いるしくやんごとなきしだいまうりて。いづれ
をもさ海ぐまさひかしづき罪しまへど。かるまぬこ
とおほく。さし月まそへて（八）夏のうち地さびしく
のこなりまさる。さふしひし人もたつぎなき心
するまえしのびあへど。いきぐましさがひて海
かでちりけ。（中）けるぎのれめれとも。さるさはぎる。
たかぐしきさ人なしもえりあへる海はざりそれば
（下らうなるめのとを云こ）ほどるつけるまころあさまて。（中）おさるまほどを

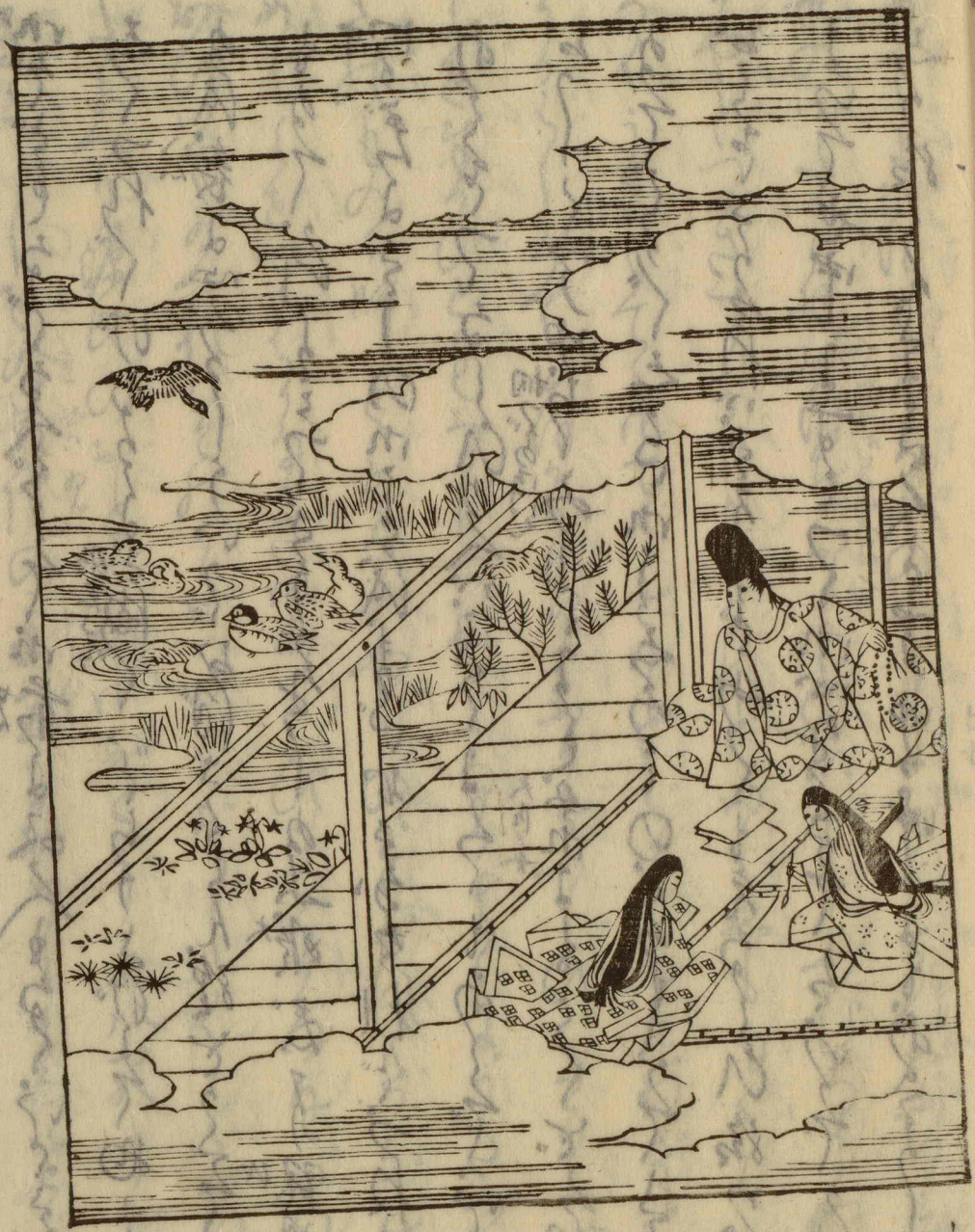
ゑすてまりまれば。こぐ八ゑやぞそぐくこゝまふ。
さすがまひろくおもしろき宮のいけ。山などの気色
ばかりむかしまかりしで。いというあれまさる後
八つれぐとそがめゐふ。けいしそどもむのくしき
人もなりそれがとりつくろふひとともなきまゝに。
草あ後やうに志がり。杵の志のぶが取えがかに
ゆきこゝにこれる。おりくまつけうる茶もみぢのい
ろをもかをも。おなじころにミりやし給しとて。
なぐさむこともおほかりそれ。いとぐしくさびしく
よりつゝひかこなきほくに。朽仏の内かぎりばかり後
いとゝきさせまて。明それをとるひ給。かうほぐし

どもまうづらふぞ。さひのほかまろちおしうけが
心なぐらもかるもざりけるちぐりとおぼゆる紙ま
いてなまくゝ世の人めいて。いまさらまとのこさしく
月にそへて。世中とおぼしもなれつゝ。心ぐりは
ひざりまなりもてなて。故君（こハノ和方）のうきなしとなるは
例の人ざ面なるころざへなど。こそふれまても
おぼし出給はざりかりたまどゝ。ほしもけるなく
ほどれかるしひは。又世まらぐひなきやうまのこ
こそはおぼゆべかめれとありかれば。さのこやは（ハノ内ノ人なと ノ句）
世人（又和方をまうけ給へとこ）になずしふ。此心づくひなしなて。いとくこ
ぐりしくころぎなさこやのうちまとのづら

もてあそぶくつぎもやとひとはもどきまえてゐる
れとつきぐしく笑ひごけことも。なかはふれて
おほれど。（公）ふさうしめしいれざりけり。れ念（おん）じのひ
まびまはこれ君（きん）ぐちをもてあそびやうく
およすけのへばことあるりし。碁（ご）うちへんつきなど。
そうるきあそびつぎるつけてもこうるぐへどもあ
こまり給ふ。姫（大）君はらうくしくふくともりかはこ
給ひ。（中）つ君はおほどうまらうこげるうさ海して。もれ
けこしこうけさひいとうけくしうさ海ぐり
おとす。芸（地）のうらくるる日げは池の水鳥だれ。
こんしくしつ。をのがぞくさえけるこゑそどあ

つれいたるまさことくこ給しかどもづゞひたるれ
ぬほうしやましくなるがめまて。若ぶちなりけこと
どもをしへ罪ゝ給いとおかしげるらいさきけほ
どる。さりぐりさるしし給。もれく孫ども。衰る
おしくさゝめれバおまちぶをうけまて
八うちすてつゞひさりましあるのかりけこの
せるさちをくれけん。こころげくしなりやと。
めをしのぶひ給。地さちいとさまげるおりします
八女なり。年ばけをこるひるやをほそり給ふとれど。
さてしもあてまな海めさて。若迷をうしづさ給
けこころぐへるおなしのなへぐめるをさまて。志どけ

なされさ後いとゝづしげなり。大姫君れすぐつまと。や
をしひさよをて。もなしひのやうにうさまぜの後。
八訂 これにうさの人硯(すぐ)にはうさつけざるりとて。うみ
なりの人ばくぢしひてうさの上
大 いうでうくすぐちけるぞとおもふまもうさ水
ゑのちざりをぞしれ。よしのどそれありに表
なりやうではおひささこえて。まぶよくもつぐけ給
もぬ程なり。八訂 中 ゆ君もうさの人とあれば。中 いますうし
おさるげにひさしくうさ出の人り
中 なくくもとねうちさすうさみなくは見れ
ぞすもりになるべかりける



れぞどもなどなへぞこそれ前(ぜん)は又人もなく、いとさび
しくつれぐげなるに、さ(姫志ノ方)ぐいとらうたげにて抱し
ぬ。衣(ハム)は心ぐるしういかゞおぼさゞらん。程とうたてに
もなりて、何とかこつ、さうがなしぬ。姫(大)君より琵琶(ビハ)
中(ウ)ぞなさうのれことは、まだおさなかれど、つねに
あるをつゝましひぬへば、こゝにくくもあらぞ、いと
おかしく罪ゆ、ちゝみ(桐つぼの内ノ)どにも、女(大臣ノ女)れにもとくとくれ
ぬて、ちかぐしきれうしろこの、さるもこそしろ
おもをざりなれば、ざえなどゆくもえなしひ給ひず
まいて也中にすこつくれ心をさてそ、いつでかは
こり給ふん、さうさ人と罪ゆ中にも、おさましう

あてはかほとゝろ女のやうにおくしたれば、ぶつさ
せのれたるしれ、かほぢかとゝのれそうぶむ、なるまや
りやとつきすまじりそれど、ゆくゑもなくくか
なくうきくてくれでうどなどぐりなん、わざとく
うゝくしくてかほかりそり、まりとふくひきてし心
よきなりひともなし、つれぐなりまくはうるづか
されものゝ師どもなどやうのもてぐれしるかを
めしよきつ、ぐるまされあそびにころをいれ、
かひいでおんれば、それかるはいとおかしくもてぐれ
しまへり、源氏のかとゝのれかとうと八宮とぞ
きてしを、冷泉院の表宮におわしまさしとさ、

朱雀院のおほ舘のよこさ海におぼしうまへて。この
文を世中にしらつゞさのべく。ひゞれとさきもてうし
づさまり給けるさもぞる。おいなく。河なるさ海のれ
なりしひにはさしくなるれなるそれだ。いよく
それれつゞさくになりしてぬる世にて。えまじらひ
給はず。又これ年ばかりひじりもりなりたてく。
今はかゞりとよろづをおぼしすてしらかゝる程に。
すこ給文やけるなり。いとゞしき世に。おさましう
あへなくて。うつろひすこのべき所のよろしさも
なりそれば。宇治といふところによりしある山里も
しまへりけるにはしり給。せしてのへる世なれば

今たとすまとなれなんと哀まおぼさかあじろの
けたひちかくみくりしかましこ川のひろりまそ
志げかるかせまかるまくぬかるもあれどいかゞにせん
されもみぢ水のなかれまも心をやかさかりま
よきていとゞ志くなかめ給より外のことなしかく
さしこもりぬる此山の果まも世しの人(小方)もれ
し給いましかどとおもひ出こさてしあくぬおり
なりなり

八 こし人も宿(やど)もそふりまなりましとなどそ
我身のさし給りけんいけるかひなくぞ覚しこが
なるやいとゞ山かさなれるれとこうまとゞれ来る

人まるし。あやまさげしてなどのおなるびとる山
がけどものこまれまるれ来りつゝうまける。峯の
あさゞざりとるくおりなくてあしくらし給ま。
これうぢ山まひぢりぢちとるけぢりすまなりぢえ
けとりしこくて世のおぼしもうるうもねど。おさ
おさおほやけごとまも出つゝへず。こもりゐとるま。
これ家のうくちうさ程ますこなて。さびしこされ
さ海まさうとさけぢはきさせ給つ。法文(ぢうもん)などとよ
こるしひなへばこうとひ(あぢりん)つかしてつねまいる。
年(八ノ)ばまるびしりなくてとどものふるさころを
とさくかきなり。いよく此世のうちそめまあぢさ

なきことは申しつくされば八詞ころづりいはちまで乃
うへはしひのぼり。はづりなき法はもとこめべきぞ。
いとかくおさなき人どもとこすてん。うしろ見てさ
ぶらはなん。えひたこちはかたちをもかへぬなど
へだてなく相談し給。これあざりは冷泉院(れぜい)はもし
さしくさかしひて。此程などなしへきこゆる
人なりけり。京は出たるつゐでは来りて。れいのさる
べきかこちなど申らんじて。冷とも給ともある
つゐでは八宮(あざり詞)のいとかしこく。おいけうの御ざえ。
さとりもかく相し給けるかれ。さるべきにて生(うま)れ
かへる人にやもれしぬらん。心かくしひもまし

さるほど。彼ことのひぢりのをさなてまうんこし
法とこそし由。びわうどちいく人ぬらぬずや。俗ひぢり
ところれわうさ人どのつけうる。哀るさとあり
なぢの法りす。宰相の中将もれ前まさかりひめて。
我しそ世中をいとどさ海じくあはひぢりなりら
とこあひあど人まめとゞめしらりいとめば
ちらぬしくそすぐしされあど。人志れどさひは。
ぞくるぢしひぢりまうら法こうのをさてや。いら
まとこうさめて法。出家のころざしいまと
よう拙志かへるをどうるさことはせひとぐこはをと。
いまとあらそては心ぢうしさ女子どもの中う色な

えおもひもてぬとなん。なげき侍りぬふとそうす。
さすがにもれく春めづらあざりまて。げまもたこの
雅長さらのことひきあそきてあそびまへな。
河波にきをひて罪し侍りいとおもしろく。極楽お
もひやられ侍りやと。こぶいにめづれば。此門ほくゑ
まて。さるひぢりのあたりにおひ出て。これ世のこと
ざ夜はこどくしかんと。そしたりしくとおか
しのことや。うしろめたくしひもてがたくもて
ひづらひぬらんと。もしさぐしもなくれんほどは。
ゆづりやいしぬるぬるどぞの給はする。これ院の
みしぐは。十のこゝろまぞおもしけるすさく院乃。

故六（源氏之）条院にあづけきこしめし。入道（女三之）のこやのれ
ゝめしとおぼしいでゝ。かれ君ごちとがなつれぐ
なるあそびがたきまなどおぼしやり。中将（薫ん）の君は
なるゝ。みこ（八）のおもひすましめしんれ心ぐんを。
対面（さいめん）してこまらぐやと。そふこころぞかくなり
ぬる。さてあざりのかへりいるまも。かなしず（薫詞）まりて
抱ましひきこめべく。まづうちくまも章色給ひ
こまへなどかたらひ給。みかど（冷）いれことのくまて。
衰なるれすまねを。人づてにきくことなど罪し
のふて
世（冷）をいとふこころもやまかりよへどもやへ

たり雲を表やへぐつる。おぎりこれ(浴ノ)れつりひをさしたる
さてくられ(八)宴に来りぬ。なれめなるこさんのさるべき
人のつりひごに。まれなる山かげに(八ム)いと絶づらしく
待よろこびなて。前につけたるさられなどして。さる
うたにもてもやし給。れりへし
(八)何とさしてこころもむといなされども世代う
ぢ山にやどをとてかれ(八ノ)ひぢりのうたをがひげして
罪しなしなへれば。(浴ん)程世にうしこのうるもいるかと
いとおしくれらんず。何ぎり。(葦ノなりかたち)中将の表のぐうしん
かげに抱し給などかたりこさしえて。法文などれ
こころえまほしこさこころざしなん。いたけなりし

よしひよりふくさひながし。えさしず世にある
ふるほど。おほやけつかくしにいと海なくあけ
くし。わざとさぢこもりてなしひよこ。おほうる
ちがぐさくもあしぬ身にしも。世中をそむき
がかなしんもちぐうるべきにあしれど。それづら
うちこゆこ。まぐさしくてなんすづしくるを。
いとありがたさ。此有様をうけ給りつゝへしより。
かくこころにかけてなんこれこ。アカくさすかなぐ。
ゆんごろに給しるどかたりきこゆ。八行 宮世中を
かりそめにとくおもひとり。いとくしきこころの
つきそむることも。つゞ身にうれへある時。なべての

世もうしめしうせちうちじめあうてちらん。ぐゝし
ちんもそろうわざちすめうほ。事わりく世中ちうつま
うるひおすまじともあうめことゝおもじよおぼゆるか
女のほどすぎさちて。後世(のちのよ)そさへすゞうちう給へんが
はうぢうきざうくまほさんべきうや。ぐぢひとちるれ
よくこゝろさうゝま。仏(かとけ)をすゞのすゝめおもむけ給やう
あるか給まそ。それづしこそちげうるおもひ
かるひゆけど。のそうすくあすさゝ心ちすうま。ちうぐ
ちくもおしそでゐめぐうあうぞ。どうしうてりちゐ。
さらまえずぢう示ちすくおもひちしろくぞうへりてハ
心さづらしげるう法の友ましそハ中れし給ふうれ

なぐのなてゝうたゝはれをうそこうよひ。こづうも
まうで給。げ(業ん)にさくしよりも。おそれ。にまもゐ
ゐへなさ海よりもじめて。いとうりなるか菜乃い
ほりに。さひなしことそぎたり。おなじき山里と
いへど。さうゝにまてうろとまりぬべく。のどやう
なるもあるに。いとおしましき水の音。波のひゞきに
もれ。にすれうちし。よるなぐ心とけて。夢なぐに
うるべきほどもなげに。すぐく吹かひたり。ひぢり
ぐちたるれたあはれ。うるしもとそうろとまりぬ
もよほしなしめ。女ぞたちなるに心ちしてゐし給
らん。よれつ子の女しくなるべたうゝにもとぬく

やとをしたしうくれ有信なり。佛のれへぞそう
さうじぐりをへぐそくぞおそすべかめる。すさぶ心
あらん人ハそしきだらとよりて。人のれそろぞへをも
こまほしうさすがまいかぐとゆしうもあるれ
けちひなり。されどさうりとせひとるるくねがひ
ま。やまかくさづ○。さそしうるほいなく。すさぐ
しきさるほざりごとをうち出。あざれごまんもことま
こがひてやなどおもひ入して。ハこやのれ有る海の
いと哀なるほ。ゆんごろまとふしひ罪し給。さびく
まり給ておもひしやうまハばそくながら。とこ
なふ山のふるさ心。法文などつぎとさしげまは

あそびはうくの浄土にすむ。ひとりびと人ぶつえんあり（蓋人世ノ僧ノ事ト云之）
法しなどは世におほかれど。おほかりこはくなう
けどはげるなうらくの僧綱（そうがう）僧正（そうじやう）のなさくせは
いと徳なくみなすくまで猶の心をといひあらはさんも
よしなくおもひ給ふ。又その人なくして佛の御でしの
いむことをさへまもつもののうへとてはあれど。げにひ
いやしくぶくぶぞてうちなげかるゝ
いとまれしくて。ひかはあやけどもそりいと徳
なくるうしつぎしあやうなるうへの後とげちなさ
れ捨ごころさだまめしいれらうしひ給へりと。つと（ハノ子ノ事をかの給ふ）
めでたき猶むつくしくるしのこあらば。ひとおもては

こころぐるしきさまして。のこまひいづることのなく
なるじ佛のれをしへをもこくちうきことひ
ひきませ。いとこよなくふるきれさとりまはあら
ねど。よき人ハもれく心をえぬふるのいとことま
もれしぬふれど。やうく[芸]こゑれまり給ひび
ごとに。つゐにこゑてまつらまほしうて。いとまか
くなどして。ほどふる時ハ思しうおぼし給。[芸]これ
君のかくさうさぶりこさしぬへれバ。冷泉院よりも
つねにれせうそこなまどありて。年ごとをとまも
おさく罪しぬりず。いうじくさびしげなりし
[分]れすこうに。やうく人めこゑ時にありおりかしこ

とつくひこさうし給ことといかめしう。これ君もまげ
さうべきこととまつけつゝおりしきやうにも。まめ
やかるかさ雨にもこころよきつかうまつり給こと。
ことせぢかりにあらぬ。秋の末つかた。四季にあて
つくし給ひ念佛を。此河づらにあじろのあることも
これどろはいとゞこゝかしかましくしづかなるしぬを
とて。これあぢりのもむ寺のごうにうけろひかて。
七日のほどとゝるひかふ。姫君たちはいと心ぼそく。
つれぐ雨さりてながめ給けるころ。中将の君。ひさ
しくまいらぬかれとこひ出こさうし給けるまくに。
明月の月のまぶ夜かくさし出るほどに出たちて。

いとまびてれともまゝ人なまどもなくやつれておりし
なり河のよるさなれば毎なまどもまづらもてれ馬ま
てなりなりいりもてゆくまくまきりあさがりて
こちもこしぬさげ其の中をつけおしまいとあら
もしさ風のさをひまほろくとおちこぶろく其乃
葉の落のちりかゝるもいとひやくかまひとやつ
ならばいさくぬれぬぬかゝるありさなどもおさく
ならひさ風こぬこちまこゝろぼそくおしく
ぬぼされなるを
差やまおろしまさ人ぬ其のもれ家よりもあや
なくもろさ我なるぞなれ山がつのおどろへもうゝ

さしもそびいぢんのをとこもききせゐとらぞまとしの
あづさねをさらけりくぞそしくくあすき氷のあづれざと
かきをくく駒のりしをとこもちば悪びてをやうい
しのへるまづれるきされ白ひぞ風ささるどひて
めしおくしぬうくやぢろくねざめ花家くぞ有ける
ちくるの月ばまぞれくくもさくつれぬまめく
ねどもしふとすびけま弓もづれくくあそび給と
こくをついぞあくてぶ花けさんのかれみくきき
もえさるぬそうしいふきおりるくへしとゆめひり
ゆりのへが琵琶のころのぬぞさるりなりけりおきて
いさましくべてをよつ月のくきあるをなれども

うちやみてられぬこゝちしてかきならしとゞら

の音も抱きあげなおもしろくさりのこと衣に

大殿めづらしく思ひてふえ笛をぞしらべ殿

はしつまゐのびさまへどもあはれけもひもなくしく

つけて夜ねべめくおのこゝちおもふてすしさそぞ

こゝちり（秋の詞）りくらんこかりおもしろきはれもう

そこともそ笑させめとはすおもる（笙詞）りはしりかへざり

あつれどころのひの程とおぼしくし笑まさんよ

おいらしいくめれくえりてつくづくよりゑらん

これへなん姫君のゆかりにさうして衣との給ひせば

るんらくぐらもんべことのつきへ（秋の）ばまうくことほうち

あそてやらせ給へとて河原おどしやとめし
しまそて笄ぐろくづてまのまこそてゆりしくもふ
ぬれしのひどもとぞうれしさ折りかがりしすうし
さらくれてさくべきよみく兩ありやうまらく
きしあそてまいりよらんほどにこれとやめのそてく
てくはいおうしんとの給へれけるひりおりらのさ
ふるほくさきそうちまもしうとめてさくりうどけ
あくおほゆきびひとこそめ時いおけられりくあん
おそらせどもべくまてもやうれるよう来りさ
りおぢふ人給うときいにとりもをさせ給ず大らく
くてやまさらおりしますとよばりくさやあるい。

なべてのひとまことせならじとおぼしの給ハ
すゝとまきばうち(笠)けしひておぢさなきれもれ
がしなりしかしのび給なれどこれ人有がらき
せのゝあしまさく出べかめるをとのまてなる後
しるべきよ我いすきぐしきころなどなき人ぞ
くておりしますらんれ有き海のおやしくげま
なべてまおぼしまくぬなりとこまやかまのまへぞ
あるかしこ心なきやうまほのきてや待らんとて
あるさのおまへいとけのすいがいしこ考て これ
ぞてことなる後なしへよをこそまけわりれと
もれ人をよしのらうまよびすへてこれ夜ねん

あへしらふ。(葉)おるさまうふべかめるすいがいの中を
もそしをしあけてうちまへだ。月おかしき
ほどまさりけれるをながめて。すぐれをうじく
まさあげて。人どねたり。すれうまいとさむげに身
ほそくなへだめるけしをひとり。おるじさ海なる
おれなどねたり。うちなる人ひ(中)さりはもしらる
すうしねかくれて。(びく)琵琶をまへにをきて。だちに
てまさぐりましつくねたるに。雲がくれたりける
月のまはりまいとあくさし出たれば。(中詞)扇なるで
これしても。月はまゆきけべかりかりとて。さし
のぞきたるは。いうじくらうたげに匂ひやうなる

べし。大そひやしたる人ハことのうへまことゆきつく
まて。いつ日を色をぢらして有それ。さ海ことまも
也をよび給れ心かれとて。うちつゝひたるけそひ。今す
こしともりうまよしづきたり。中詞をまぢずともこれも
月まちるるゝ抱かハるゞ。ちるゝきことをうちとけ
の給ひしたるれけそひども。薫ん さしまよそませひやる
しまはまずいと哀まるつしうおりし。昔物語るゞ
まうつゝへて。けうきゆかなどのよむをきくまゆ
りやうのことをいひたる。さしもあらざりけんと
よくをしたるしるをげに哀なるもあれ。ん海有
べきせなりやうとうろうつりぬべし

蓋ん
きりのふりそれぞさやかりこゆぶくもあ
らぞ。まこ月さし出なんとおぼしほどる。
おくのこよるに。人おもすくつげこそゆな
ひとやあらん。ぞぞれおろしてこれいりぬ。姫志在
おどろきがほにはあらず。たまぐやかるもてなして。
やそうそれぬるけるひどもこゑのをとさず。いと
なまくかる心づかしうて。いこじうあてこゝやびの
なる所。蓋ん
おそれとおもひのふやをしこち出て。方に
此車ゐて乗るべく。人をしらせの川おりゐる
ねぬ
さふらひに。蓋詞
おりあしく乗り侍るそれどなかく
りれしくおもふことすこしなぐさめてなん。かく

まふしふりしきてしよいたうぬれまろ。うごとも
まさきむりしとのまへば。まつりてきたる。りくえ
えやしぬらんとはおぼしもよらでおとけたり
つることぐもをきやしぬへらんといというじく
ちづしおやしくかうづしくまゐふ風の吹つる後。
おもひかけぬほどなれば。おどろかざりけるこころ
をそさすと心も肉どひてたちおいさうす。れせうそこ
なすどもつたふ人もいとうねくしき人なめる後。
おりからまそよろ所のことゆとおもひてまゐ
きりのまぎれなれば。おりつるこすのまへにおゆえ
つでくつゐ行給やま里びたろ口人どもなさし

いとへん云の楽も見えで、此をとれさし出るさ海
もたどくしげなり。これ（蓋詞）まれ前まはらしく
なく侍りうちつけよあさはこころぐるりまてい
くもたづのまつるまじき。やまれかけぢるまさ
まふるを。さ海ことよとそりく家けきさびを
りきのつは。さりともあらんしじしるとんとなん。
これもしう侍りといとまめやかなの給。（姫宮ノ人々）つかさ
人どのなぐらかな物ことゆべきもなく。さしかり
くやうしげなるもかさしらいさかれど。女房乃
あくふるきをおろし出るほどひさしく成て。（大山）つぎて
めいたるもくるしうて。（大詞）なまごともしひしらぬ有居

よてしりがほまもいかゞきこゝ也べきとゆくよしあり
てあてなるこゝしてひきいりながらほのうまの給
筆行
り何しりながらうき波しらずがなるも世れさが
としひ少へしる波ひと取しもあまりおぼめ世給
らんこそくちおしうるべかれ皆がこうよろ何を
しひ是波しこれすまねなどまこゞひきてさ
世給れこゝろのうちはなるまごともすぐしくをし
ちられ給れば波りくしのびあまり給ふ ふるき
あさくの程もつゝを給ちんこそかひは給ふ先よれ
つれのすきぐしきすぢまはおぼしめしこる何
べくやさやうのるもつぎとすむる人給ふらも

なびくべうもあらぬころづよきまゐんをのづから
ふさうしめしなのいすりやうも侍りなまんつれぐと
のミすぐし侍る世の物語も異しさせ取またのミ
異しさせ又かく世ごとなれてながめさせ申ふらん此心
のまゝざらさしまゝさしもおどろかさせ給ひり
ふさえなれ侍らばいりまゐふさ後より侍らんなど
おほくのおへばつ大ん ましくいふへまくて おろし
つかいべの出きこゝろまぞゆづり給ふ弁詞 さしへなく
さしすぐしておかなうじけるやうこちらいさき
おまられさ後まも侍るれ こすれうちつりこそ
つきへぐいまれくほどさしも思やうまこそなど

たてうまいつゝ思のさぶすぎたるもうたてうら
いたく思ざらはおぼしいとも（弁詞）あやしく世中に
すまぬ給人のうずまもあらぬれ有き海にてさも
有ぬべき人ごごまとふらひうぎまへ罪を給もえ
こそしずのこちりまさり給めるに。なりがたきれ
こころざしれほどは。うずまも給らぬこころにもあき
ましこさまでしひたまへきてさせ給るとけうきれ
ゆちにもおぼしたりなどに罪をさせ給にくきにや
給らんといと問こゝろく拙なれたるもなる海にくき
もれうらけたひいたう人めきてらしあるこ思なれば
いとさ（葉詞）問ざもしらぬこちし問るにうれしき

れけれひまこそなまごともげませひきり給けるが
これこそまちかりとてよりねぬへる後、姫宮を
そばよりこれが明ぼのくやうくもれくいろけの
なくまげまやつしこまへるとこゆるうりごぬす
がこのいとぬれきめりこるほどうこそこれ世の
ほかれまほひまやとおやしさまでほりこちこり、
これおいへ(弟)そうちなきぬ(訶)ざしすぎこるつこまやと
せぬへきのぶれど衰なるむかしのれ物語のいな
らんついでまうち出こそしさせうこそしなこも
ほのめりしきろしめさせんと年ごろもんずれ
ついでまもうちまぎせこまへつこるきるしまや、

うれしきありに侍る後まづこゝにおぼれたる洞
まられてえこそ罪しさせ侍し。とうちつるくく年
女ぶとくにいふじく地がるしとせへり。菩薩ぶるこゝぶ
すぎたる人は洞もろるものとはみきくたまへど
いとかうしもせへるもあやしうなりまて。寝(訶)に
かくまいることはたびかさなりぬる後かく衰しるも
おへる人もなくてこそ。家けさこちの程にひさり
のこそほちつれうれしきついでなるをことなか
のうひ給そうしとのたまへだ。(弁訶)かうつゝでしも
侍らじかし。文侍るとも。東のまれほどしるぬ
命のこれはべきことも侍らぬ。さらばこゝかる

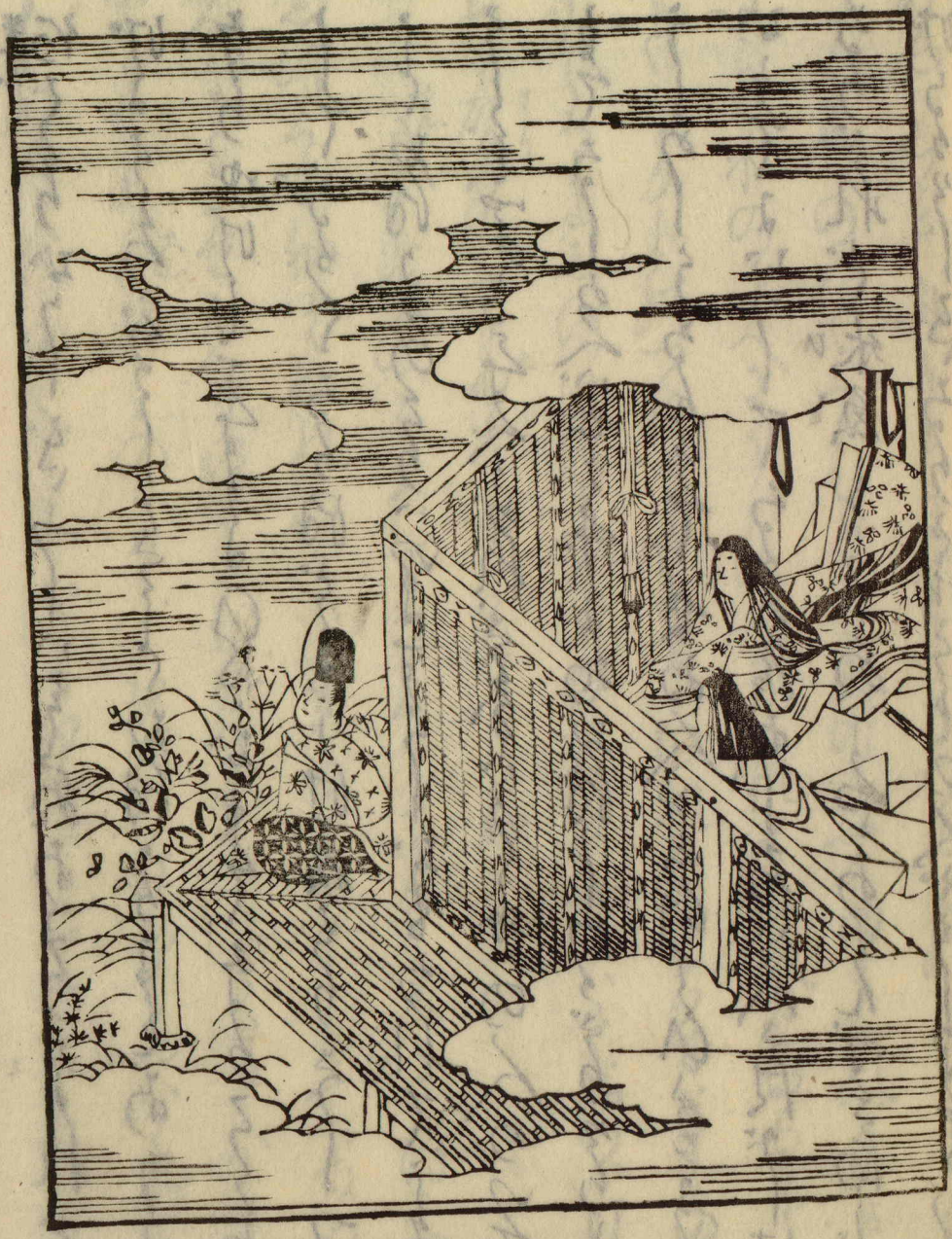
かゝれ世ゝ侍ゝりとゞりしろしめされ侍らるん。
三条の女三にさふらひし女三ノ母のとゝ女之に侍従ゝ。かゝるくなり侍ま
けるとほのうまさく侍し。それかゝむつましこ
しひかへし。あるじ程の人おほくうを侍まけり。
世の末まゝてうかるゝせかいよりつゝとりまうで
こゝて。此女とせ六とせの程なん。これまうくさふらひ
侍る。えしろしめさじかし。此ごろ藤大納言とゆるる
れこれかゝの柏木の漢つ雲にてかゝれ侍ましゝ。もれく
つゝでなどまや。彼れう人とてこゝろしめしつゝふる
ことも侍らん。すぎにてつくぢくもへぐらぬ心ち
のみし侍る。それありのうるしさも。まぶ袖のかゝく

なり侍らず。おもひのへらるゝと。氣をおりてうぞ人
侍れば。かくおとなしくなるせ給ひけるれよりひの
御ども夢のやうになるんかれ。お糧（ごん）大納言（拍子）のれ先
のとよ侍しを。弁（べん）が母になるん侍し。朝夕につか
うまつりなれ侍しより。人かぎまも侍らぬ男
なれど。人にしられぎれこころよりもて。おもひけり
こと紙。おりくうちかすめの給しと。今いかぎりに
なり給ひしれ病（やまひ）のもとつくるめしよをて。いさくか
の給とくことなん侍しと。きこしめすべきゆへなん
一こと侍れど。かぎりの事也。出侍るまのうりをと
おぼしめすれこころ侍らばのどうになんきこしめし

りて侍るべきゆゑ人どもかたらはいくさし
すぎたりとつきしろひ侍めるもことわりにあるん
とてさすがにうち出ぎたりぬ（差ひ）おやもしく夢がたり
かむなぎやうのもれくとしずがたりすらんやうに
めづらかにおぼさるれどおもれにおぼつるくか
ぼしつることのすぢ侍ことゆれだいとおく
ゆかしかれどげに人めもしげしさしぐるにふる
物語にかくづらひて夜をあかしたてんもこち
うちしうるべかれだ（詞）そこそこと思ひつくことは
なき物からいましへのことにきく侍るも物哀す
なんさしばかるしぎこれ物りきうせ（きり）のへ霧たれ

ゆかばとしたるうへきやつれをおもふくれら
んじとぶめられぬべきさ夜なれぞ心ひかふ
心のほどよりハくちおしうなんとてこちなふる
芸ハ
れおりします寺の鐘のしゑかすかに聞てさり
いとかくこちけたれりこれのやへ雲おもひやる
へだておほく哀なるに往これ姫君こちのれこゑ
のうちども心ぐるしうなまごとをおぼしのこすら
んかくいとおくまりこまへるもことくりぞうし
などおぼせ
芸
あさぼらけ敵後もえずこづれこします乃
お山もこさりこゑてぞり心ぼそくす待つれとこち

かりやすしひとまへるさ海をこ(比)やこれ人のめな
れたりざる程いとことにおもひきてしかるをよい
ていかゞはめづらしうこゞらん(弁)れかりまもしつらん
まくげるさひこれば(大)御のいとつくましげるて
(大)雲のゐる(こね)夢のけ絵を粘ぎりのいとゞ
ぬゞつるころまも有れどそしうちちげき絵
ゐるそしきおさうしず表なり



荒ん
何ぞうりおかしきかしハえしぬあらうなれど
げるころぐらしきことおほうるまもあうう
なりゆけどさすがるひたおもてなるこころち
して河なかくなるほどるうけ給ちうさしつる
ことおほうるのうりハいますうしおもなれてこそハ
うしと思ひさすべかめれさるかハかく世の人めいて
もてなしぬへバ世とすぎまもおぼしつかざりそうと
うらめしうるんとて夜ゐべがしけしひうるまし
おもてまおいしてながめ給おじろハ人さはがしげ
なりされど氷魚(ひを)もよしぬまやあらんずき面じ
げるかりしきなりとれともの人どうしつまていふ

げるかしきなりとはともの人を[illegible]

[illegible]あやしき舟どもは[illegible]りづきとれくちまと
なき世のいとなるこどもまりふき面どもれどもか
なき水のうへまうかひたるこれもしへどおるし
どもなりよれつねなきなりけれいうかいぼうまの
うてなるましげけきゆとしつべきせかいとしつぐけ
らか硯めしておなしまきしし給

[illegible]しし姫のこゝろとくてこゝをさすさほせん
しげくる袖ぞぬれぬるゝぬるんかしとて殿ゐ
べまもせかりいとさむげまいらくぎこゝろかし
てもて[illegible]のかなどおぼろけるんいとづか
しげるる夜どきとしてはかるありいとて

×さしかへる宇治の川おきあさ夕の霜（しづく）や袖
をそうしろうらん。あさへうきてといとおかし
げなうきゆへり。まほ（芸心）はまめやすくもれし給はりと
心とまりぬれど。此車ゐて来りぬと人ぞさはがし
ゆれば。夜ゐ人どうりをめしよをてかへり（芸詞）ひくらせ
給ふんほどまうらずまうべしうどの給ぬれたり
此ぞどもはこれこれ（夜ゐ）人まぬぎかけゐて。どり（京へ）まつかは
しつかれゐ成しまゐり人間

蓋ん年
おいべの事ばかりこころまかつまでおぼし出
らるおもひしよりはいとゝまくまゝりておぼ
とりまおかしうらつる所けしひどもおもひげつり
そひてなほおもひこゝろれがこゝろ世なりなりと
心よくしひしらる所文なり給けさうごちてを
あしぎしろきしきしのあつぞこゝろに筆にひき
つくろひえりて。すこつぎ三歩行りてさまふ文ノ詞
つけなるを後にやとあつるくさゞめくべりて。のこり
おほうもくろしきけぎくるんがこゝしきてとき
つゝやうに今よりはこすれまへも心やすくおぼし
ゆるしべくるん所山ごもりして行らん日数もうけ

給たりをきて、いぶをかりし務(きり)のまゝよひもたるけ
侍らんなどぞ、いとすくよかまかきかへる者をのぞう
なる人は使(つひ)にて、それおいべ(年)ぐ○てふこもさしせ
よとの給、廣ゐべかさむげにて、さ夜よひしなど、
衰(蓋ノ)ばおぼしやつまて、おほきなるひまりごやうの四
あまたをきせ給、又の日それは寺にもなり給、やま
ごもりの僧どもこれごろのあらしにはいとこころ
ぼそくふるしからんを、さておいします程のふせ
ゐふべからんとおぼしやつまて、さぬいたなどおほ
かりかり(ハノ)はとてなひもてく出給あしたなりかれば、
とてなひべどもにいたきぬけさころもなど、すべて

一くだりのかどづ。おくうぶりのだとこたらす
たまふ。夜升べかれれぬぎすてのえんにいらじき
りのれぞどもえちらぬしろきあやのれぞ乃。
ちよくといひしらずにほへるをうけしきて。
男をもたえうへぬもれなれがまけかくしかしぬ袖
のかぼ。へどもとうがめられめでしらるなん。中ことと
しろせかりけるころにまかせて男をやもくも
三 かるまれぞいとむくつけきまで人のおどろく
まかひとうしなひてがやとさへど。重きき人もれ
うつりがまてえもすくぎすてぬぞおまりなるや。
黒ん 大
黒ハ非黒のれもりいとめやすくらめかしきぼ。

なりしく三絵八三やまもうくれせうそてありさとなど
人ぞ罪しさせれらんぜさすれだ八羽なまはけさう
ごちてもてない絵らんも中こうしてあらん。例の
ワうどにまぬれころどへなめる後なりらんのち
もなどひとことうち目のあしてしまださやう
まて心ぞとめしらんなどの絵なり。れこげうしも
さ面ぐのれとふしひの山のいとやまあまるもし
ことなどのしまへなる。薫山まうでんとおぼして。三の宮
のかやうにおくまりしらんあたりの。こまきりをん
しそおしうるべきれと。あらましごとにぶり
のしまふ物後。きこしとげまして。れころきしがし

なしんとおぼしてのどやかなる夕暮にまいり
まへりれいのさ海ぐなるれ抱がうりをとしうらし給
つねでに宇治の八ゑやのことくうりいでくとしあ
月のありさ海なまどくくしく罪し給に白ん愛いと
きちにおうしとおぼいたり蓮ん されどまとれなしきと
こそいとゞれこころうごきあべくいひつゞけ給白訂さて
それありけん也こと罪まどうこせ給はざりし丸まろ
なるましかばどうしこ給蓮訂さりしいとさ海ぐれ
らんずべかめるとしをどうにこせさ海も思かまん宇治
いたりはかくいとともむまれたる身にひきこめて
やむべきけるひにも侍しねばかるしずれ侍しぎき

せむやともあれどうぞかうづ○よせのべきに。
かやすきほどこそすまほしくおもふとくすこぶる
べき世なり給ふされどもちかくろへつるはうあなかなれ。
まうるはこ家ありぬべきに。かの所ちしきうち
ものびたるすこしも。山里めいたる所などまたその
けしき給べうあり。かれにこしらへするげうもいと
うつめひだりぢ段までちかくあうぞおもしと。
年比思おもふづり給ゆてこそとゞまらこそせめ給ら
ざりされ。ほのかなりし有様のことをとりもすく。
まほちらんや。げもひ有様もらい。ざりあらんとぞ。
わかまほしきをとをばし給べきあるまじてのみ。

白ム
たてくいまめざらていとゆたくおぼろけの人に
心うつるまじき人のかくかくおもへるを、とろか
るらじとゆしうおぼしことうざりなくなりぬ。
初 又こよくそしきこゝおへと人をすくめおてかざり
ある此男のほどれよくだけさ紙いとらしきまで
心もとなしとおぼしたれば、おかしうて、いでやよ
しなくぞ侍、志づし世中に心とどめじとおもひおへる
やうある男にて、なほざりごともつくましう侍を、
心ながらかなくぬ心つきそめなば、おほきにおもひに
こぶふべきことなん侍るべきと、アルしうまへだ、いで
わかとくしれいのかどろくしきひおり

よく薫。こそくしがらそひ給ごゝろのうち
まは。かれかうべのはのめしくすぢなどの。いとゞ
うちながめられて。あれ哀なるまゝ。おかしとこゝろ（世ノすゝ之）
ことも。めやすしとこそくあるらも。何ごとも心よきま
くゆらぜなかり。十月になりて。五六日のほどなり
（薫）宇治へまうで給。あじろこそこのごろはらんぞ
めときこゆる人〻あれど。（薫詞）なにかはそれひをむしに
あらそふ心にて。あじろにもよらんとそぎすて
のきてかろらかなるあじろ車にて。かとりのなをし。さし
ぬきぬはせてことさらびたり。（八）宮まちよろこびて
ところにつけたるあるじなどおかしうしなし給。

くれぬれば、ほほとろぶしちりくて、さきぐさしぬへる文どものふるさなど、あざりもさうじ、ゐろ志て、ぎ義なまどいとを給、うちも雨どろまず河風のいとあらましきに、木葉のちりかふをとく、水のひぐさなど、衣もすぐさて、如ねそろしく心ぼそき所の雨なり、明ぐ蓋ちくなりぬらんとさふ程に、ありし志のくめ、ほもひ出られて、琴(きん)の音の衣ちりこと乃ついでつくり出て、さきのこび霧(きり)にまどしされ侍し明ぼのよいとめづらしきまれく音ひとこゑうけ給ひしのこりちん、中こにいといぶりしうあらず、ほもひぬへらくなど、アれし給、八詞 気をもう成も

あらぎぬもひぬへらくなど罪れ給。食ともかれも

ちひすてくしは。ぎりしきくしことをえれ志て
なんとのたまへど。人めして琴(きん)とりよせて。いとつ
きなくなりまさりや。志るべすゝ。もれく者につけて
なん。也出らるべからうとて。琵琶(びハ)弟して。おらう
とまそぐのしぬふ。笙(せ)りて志るべ給。さし(詞)ゝり。ほの
かるきて給しおるゞ。抱ともしぬへられざりけるれ
ことのひぐきかうるやとこそ也たまへしがとて。心
とけてもかきこそ給たず。いで(八詞)あかさがるや。志か
れらくとまるぐらりのてなどいいづくよりもかしく
もでいつこたりこん。あるまじきれことなりとて。
きまきかきなるしぬへる。いとあられに心すぐし

うえへも雲の払ひぞのゆてうやもうるべし。いと
さぐくしげにおぼめきなて。うろぐらへあるを
ひとりぐらりにてやめ給つ。詞これ口うりにおぼしなく
て。おりくほのめくさしれことのほとそうろえ
うろやとさくおり仍れど。うろとぐめてなども
あしで。ひさしうるりにそりや。うろにまうきて
をれくうきなるすべかめるは。河なるこだりやうち
あたすらんろるうもれくように。次ぐりれだうし
などもと聞らじとなんおぼし仍とてかきなるし
かへとあるるに罪しうまへど。やひ姫宮達ん ようぐりし
ひとりごとをしき給けんごにあるゆをいとかうは

ちらんとひきいりつゝ。これにて給ひぬ。ハノ ぶびく
そぐのし罪しなへど。姫光達 さらく罪しきまひてやみ
なぬめれば。蓋人 いとくちおしうおぼゆ。ハん それつゆでにも
くあやしうよびかぬしひやつまてすぐを有様
どもれ。しひのほかなることなどもぐしうおぼいた
つ。詞 人まゐるいでしらせじとくぐゝすぐさど。
けふあすとも思ひぬ力のおりすくなさまさすがな
り来と云き人ハ。姫光さちくす おちあふれてさすらへんこと。
これのこゝそ。げる世をもなれんきハのほゞしなり
それとうちくしひなへば。蓋人 心ぐるしうゝなりなふ。
詞 ひざとのれうしろゝしろ。ちかぐしさすぢる

ゆらぎともうとくしうぎおぼしめされむと
なんしひおぼ。志ぐしもなぐらへ侍らん命の程は
ひとこともかくうち出申れさきてんさ海をうづへ
侍るまじくなんなどとおへばいとうれしきことく
おぼしの給。さてあるけきぐさ安のれをこなひ志給
程は。れおいべめし出てあひおへり。ひめ君志れ
うしろこまてさふらもせ給。弁の君とぞいひける。
年は六十にすそしたるぬほどなれど。安びうに
中へあるけるひ志て。柏をまぐきこ也。右衛大納言の
君のよとくもに柏をしひつ。病づきちるくなり
給ひし方法を申し出て。なくこと限なし。げによその

人のうへとさうんどうに。衰なるべきかうことぞ也。
まして年ばおぼつるくゆりしういかるりたん
とのうじめふりと。佛まもろれこと紙さぐかく
しらをおへとねんじつるしるしまやうくゆ先の
やうに衰なるかぐらりをおぼしぬついでてりしさく
つけつらんとおぼすまうすぐとぐ先がたりたり。
詞 さてもかくそれよれ心しりたる人ものたりおへり
けるにめづらかまもうづしうもおぼゆることも
すぐに稚くいひつたふるさぐひやまたもあらん。
さしごろかけても罪をよばざりけるとのおへぞ。
年詞 小竹原と年とくるちて。又しる人侍らじひとこと

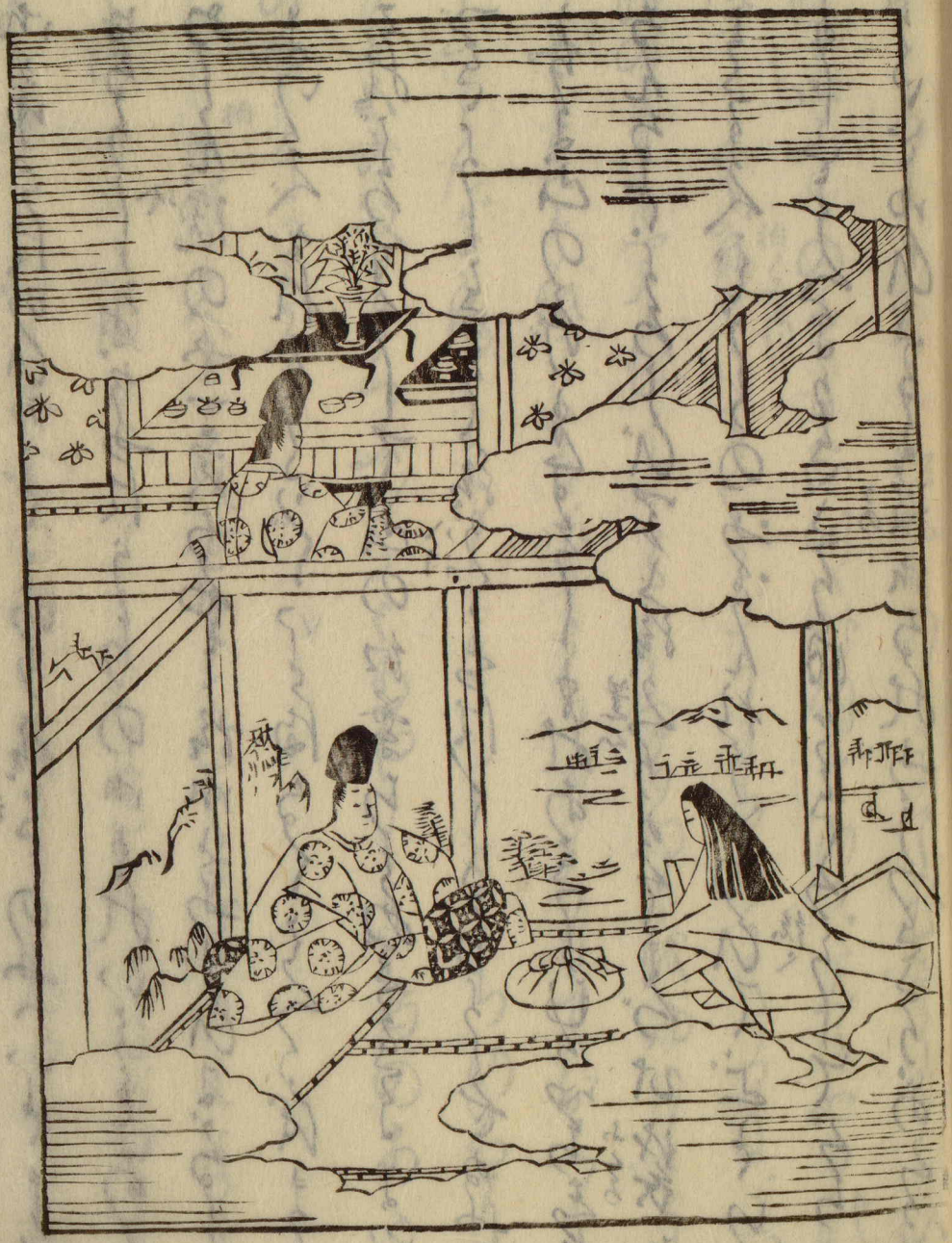
まても又こと人にうちまゐび給ふず。くもれくり
なく数(ゴ)なるぬ男の御ぐに給れど。よろひるり(柏本)れ御
ぐけにつきなりて給しかば。をのづからものゝ事色
をもこなりそめしに。れ心(柏ノ)よりあまりて御ぼし
けり時ゝこゝぶふるりの中になん。ゝ夜さられ出せう
そこのうちひも給し。ゝくそらいてかれば。くもしく。
まてさをず。今(柏)それとぢめるなりまて。いさくりの給
とくことの給しうら男にはをさ前なく。いぶせく
ちふまへつるりつ。いかりしてかしきこしめし
つるべきと。そらぐしからぬ念ぞれついでる
もおもひしまへつる後。伝は世におりしましからと

もおもひたまへつる後、仏は世をおいしまいらと
なんおもふ事へしりぬる。ぬしんぜさすべきものを
侍り。今はほうはやさも捨(そ)侍るんかく朝夕のさしを
しらぬ男のうちすて侍るべ。おちくるやうもこそ
といとうしろめたくしかれど。これ(ハ)安つたりまも。時ぞ
はのめせ給せまちいでなりしかば。すこしこれ
もしくうかなりもやと念じ侍りつる。ちから出
まうでさてなん。さしまこれはこれ世のことまを
侍らじとなくくこ後なる。生(うま)れ(蓋)給ける程のことも
よくおぼしいしつ事も。むなし(柏ノ)うなり給しさつぎる。
母は侍し人はやがて病づきてほどもへどうくれ
侍りましかば。いとしひたまへしづき。藤(ふぢ)ばろもしら

うきねるしこそとをもひぬへし程まさしどろ
よろしぬ人のころをつけたりけるが人をそうなを
どちてよしの海のうてまでたりまてまうりまし
かば京のことさへ何とうえてその人もうしこまて
うを作りし後十とせあまりまてなんおろぬ世の
心ちしてなん海のぼりたりし後これ[ハ]ゆえ
ちくがるまつけて[ゆ]らいよりまりかよふゆへ作し
かば今いかう世ままじくふべきさ海まを作らぬを
冷泉院の女[殺仕大臣女之]れどのくれかるなどしそいはまこさくなれ
なりしいたりまてまりよろべく作しかど[ゆ]しさ
なく見し作て[え]さし出作しで[ゆ]しがつれの[ゆ]は

なりまでかゝるありにかなしいけりうせかまけん。詞
詞 まことのけうざりとこうし人はずさくなく
なりかまけり。まつの世まおはくの人まとらん今世。
きろしくせめへてしそゞすゞまめぐしひかれるゞ
ふこゆう行るれいのあけそてめゞ 詞 よしさうゞこの時
地 從はつみすべうるんおしめゞみ人ふきめ心やさしさ
さころまてふきさん。かなしやいとひし人とはのるよ
おばゆうはいけくじけぐろうるうし行まや。紙よ
なれとやうそうをよみてるんふさくうろふいめん
あくはつことをさきおまてものべうけることちゞ
の経さゞ 詞 やうまそしまさいおもせう 反古 はぐぜの

かびくさきにとゝかくろまめひいれたるさり出てなる。
おまへまてうしなるをゐへ我(柏ノ)れいべくもあらず
なりまたりとの給ふをてこれ此文とさりあつめて
給ふをたりしかば小侍従ま又あひミ給ふんついでま。
さぶうまつるへ来しきんとせひゐへしをやがて
副給りましもけるくしごとまはあらずうるしう
なんせひゐふるとこゝ也。(芸)つれなくてこれをかくハ
給つかやう(芸ん)のふるゞへハどはどがたりまや。おやしさ
ことのゝあしまいひ出しんとくるしくおぼをど。
(寺)遠くもちらさぬうしとちらひつる。さをやとまる
ぬりひこゞれぬふ



れうゆうはいひそぎまゐり給ふのよしいそぎまゐれ
おほせありければ、くちのはかまいそぎあき
めしかん院の女一宮ちやうこ給はれとおもひまゐらせず
まいるべきれどもいそぎちらばまいる
それがしすこしてさ山の紅葉ちりぬさきにまゐる
べきよしをきこえ給ひくさはくはらうらせおもひ
かうは山のかげもすこしもれおもてむらさきにそ
おんなはしはるしび男に給ひてはてまつりけ袋を
こうまんべしけうのみきんれうとめひてよといふ
めしとうふまりさきこうはそきこうしてくらの
くらいとゆひつる使はれなるものはつきこうおんなる

おそろしう覚て絵色々のうまにてむさうまうよひ
けるれふまの色もいひしむひぞあるさてはかれ
れてまて病（柏ノ文ノ詞）とまくかぎりまちりまうるに文
ほのうまも字もむことかうくなりぬるほゆかしう
さふことはそひまうれかうちもかうりておもし
ますらんがさ海ぐかるしきことをこうちのくり
がこの六枚ありつぶくとおやしき鳥のあと
のやうまうきて
（柏）めれまうへまこれ世をそむく君よりもよそ
まつるくこ海ぞかるしきまうこうしまめづし
くきくらべる二葉（ぞ）のほどもうしろめたうも

ひあふかるゝハそれど

拍
いのちあらばそれともみまし人しれぞ岩ね
まとめし松のおひすゑ。かきさしこゝろやうまいと
こゝぢりがくしくて。詩法の意まとう人まハかきつけ
こゝろ。志見といふ出のすゑかまなりて。ふなめさ
こゝ海かびくさくながしおといきしぞ。こゝいまかき
こゝんまもこゝろぬ云の葉どもの。こゝ海ぐと
さゞかなるとこゝ給まげまおちくまこゝましかだと。
うしろめこういとおしきことどもなり。かゝること
世まゝるあらんやと。心ひとのまいとゞ申れ出たし
さそひて。淵へ来らんとおぼしつゝも出こゝれぞ。

上平絵

みやのれまへはまゐりのまへればいとゐするごろあまく
ワやうるうさ候しおそ疑よこ給候とじらしくひて
あそうしまへりおまり候とりるおとともよ
られさそまうんなどさろりこあそようご
まおもひおまへり

69038
6 Ap 78